20. 稲木・ダテ

稲はカマ（鎌）で刈り取ってイナキ（稲木）とかダテと呼ぶ木組みに掛けて干した。かつてどこでも見られた風景だが起源は古い。ドタでは苦労も大きかった。

◆イナキアシ（稲木脚）

〈A〉はイナキの脚にする棒である。長さが短いものが 219cm、長いのが 247cm。イナキにするのはヒノキが強くて持ちが良く、スギは軽いが弱くて駄目だと言う。稲を掛ける棹は竹を使った（一津屋）。納屋や軒下に保管しておき、リアカーや井路舟で田まで運んで組んだ。〈B〉は明治の「摂津国各郡農具略図」に見える島上郡の稲干脚と稲干竹。

◆一段掛けと二段掛け

鳥飼下など足元のやわい（柔らかい）ところはヒトエカゲ（一重掛け＝一段掛け）、しっかりしたところではフタエガケだった。フタエガケはババガケとも言った（鶴野）。

千里丘では冬作の麦蒔きのため場所をとらないようイナカ（稲架）は 2 段に掛けた。

別府のドタではナワテ（畦道）の上にフタタナイナキ（二段掛け）を組んだ。井路に沿った 3 尺（90cm）以上の幅のあるナワテにダテ（稲木）を組んでおくと、乾燥したらすぐ舟に積める。井路の両側はフタタナイナキで、人が通っていても見えないほどだった。

◆イナキ結えたら一人前

イナカ（稲架）の脚は 2 本、所々スジカイを入れて補強した（千里丘）。

イナキマルタ（脚の棒）は、〈D〉のように 2 本少し内向きに向かい合って泥に突き刺し、上端を絞って結わえる。そうすると根っこが沈まない（一津屋）。稲木を組むことを、「イナキユウ（結う）」と言った。「イナキ結えたら一人前や」（一津屋）。

1 人で 1 日 1 反刈って稲木に掛けたら一人前。絶対こんだけはできない（千里丘）。

◆稲木はオモテを風に向ける

フタエガケでは 2 段掛けの側をオモテ、脚だけの側をウラといい、ウラの脚をムコウアシ（向脚）といった。稲木はウラカゼに弱い。ウラカゼなら風速 15mで倒れるが、オモテカゼなら 30mでも大丈夫。風が強い時は 5〜6 把外して風の道を透かした（鶴野）。

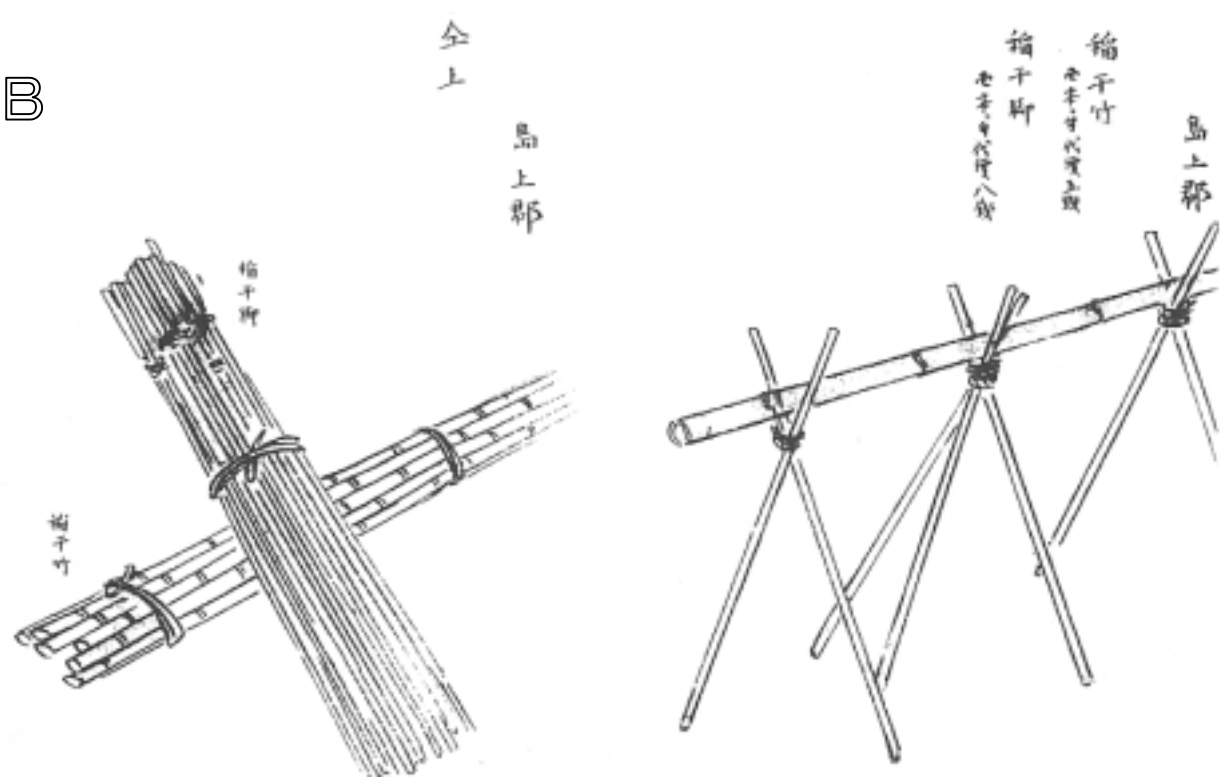
稲木は風の来る北か西に面した脚に中段の棹を結わえて二段掛けとした（一津屋）。

◆夜更けにかかる稲木掛け

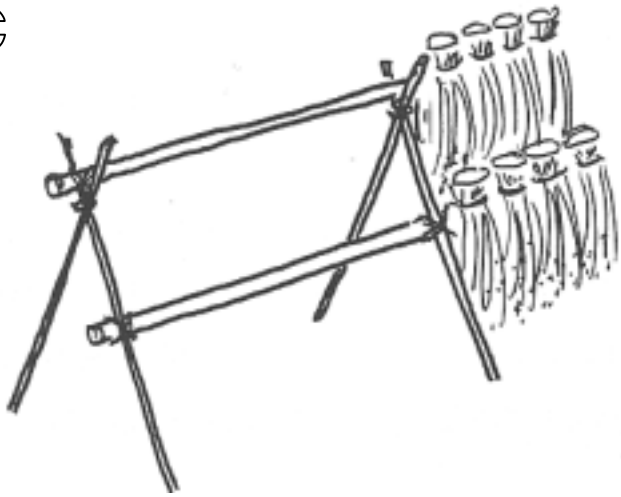
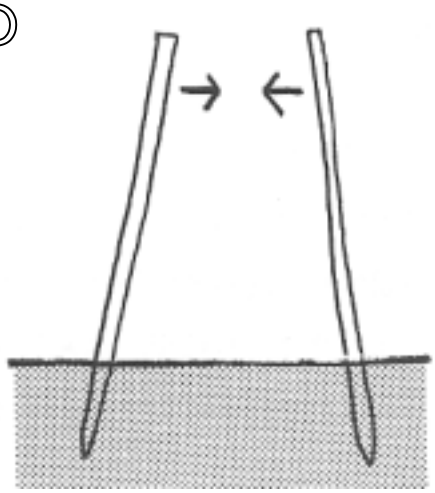
戦時中、家にハタラキド（働人）がなく一人で田刈りした。昼間に 4 把・3 把・2 把・1 把と山型に積み上げておいて、ヨサリ（夜更け）にイナキに掛けた。「タカリで夜も 9 時になると怖わおまっせ」（千里丘）。ヨサリは『伊勢物語』にも見える平安時代語。

A

B



C



D